

目 次

巻頭言	金城大学 医療健康学部 作業療法学科 河野 光伸 (大学院 総合リハビリテーション研究科)
-----------	--

特 集

未来への生きがいを生む作業療法

☆脳卒中の追跡調査から考えたこと☆	澤 俊二 1
-------------------------	--------

研究論文

1. 精神科作業療法に参加した

看護師へのアンケートから見えてきたチーム連携の問題点

.....	金沢医科大学病院医療技術部 心身機能回復技術部門	前田 勝也・他	11
-------	--------------------------	---------	----

実践報告

1. 転倒を繰り返しながらも訪問リハビリテーションにて

強みを生かした関わりにより生活目標を達成出来た一症例

.....	社会医療法人財団董仙会 恵寿総合病院	五十嵐満哉・他	17
-------	--------------------	---------	----

2. 五十肩を既往にもつ症例のSudeck骨萎縮による上肢機能障害

～肩甲骨に着目した評価と介入～

.....	市立輪島病院	坂下 宗祥・他	24
-------	--------	---------	----

3. 公共交通機関を利用した外出練習の実践報告

～退院後の生活が具体化し自信に繋がった事例～

.....	医療法人社団浅ノ川 金沢脳神経外科病院	庄山 玲奈・他	31
-------	---------------------	---------	----

4. リハマネ（Ⅱ）の算定により具体的な行動目標を確認しながら取り組むことで

活動と参加の拡大につながり、要介護度が改善した一例

.....	能美市介護老人保健施設 はまなすの丘	明福真理子・他	34
-------	--------------------	---------	----

5. 末期肝細胞癌患者における作業療法経験

—維持的・緩和的がんリハビリテーションにおける作業療法の意義—

.....	金沢大学附属病院 リハビリテーション部	堀江 翔・他	37
-------	---------------------	--------	----

6. 失語症により表出能力低下を認めた事例の役割活動参加に対する作業療法 ～認知症高齢者の絵カード評価法・作業に関する自己評価・改訂版を用いて～	医療法人社団浅ノ川 金沢脳神経外科病院 平田 純・他	42
7. パーキンソン病を有し大腿骨転子部骨折後に、多職種協働の介入において 生活行為拡大に成功した事例 ～リハビリ会議を活用した訪問リハビリと通所リハビリの併用を通して～	介護老人保健施設 ふいらーじゅ 西谷すずな・他	46
投稿規定		54
執筆要項		55

巻 頭 言

作業療法士という専門家とは

金城大学 医療健康学部 作業療法学科

大学院 総合リハビリテーション研究科 河野 光伸

21世紀に入り、我が国では団塊世代の高齢化に伴い、さまざまな疾病による不自由を余儀なくされた人が多く存在する時代となった。そのため、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士（以下、療法士）の需要が高まり、療法士養成校も急増した。

一方、我が国では少子化も進んでいる。この少子化によって、療法士の人材供給における問題が大きくなっている。それは、少子化による18歳人口、つまり、受験者数の減少である。そして、先に述べた養成校の急増が、療法士養成校への受験者数の減少にも繋がっており、その結果として入学生の多様化が進んだ。もちろん、少子化だけが療法士養成校の受験者数減少の原因ではないだろうが、実際に定員に満たない養成校も増えており、作業療法士国家試験受験者数をみると、第44回試験は約6,600人であったのに対し、第52回試験では約6,000人となり、8年間で約600人減少している。

ところで、療法士の国家試験では第39回試験からX2問題が導入されるようになり、出題形式の変化が起きた。第42回試験から旧分類という専門、共通問題とともに十数問のX2問題が出題されるようになり、本格的なX2問題の導入がはじまって10年が経過する。この国家試験の出題形式変更と時期をほぼ同じくして国家試験合格率も低下し、ここ最近の作業療法士国家試験の全国の合格率は80%前後になっている。この国家試験合格率の変化には、出題の難易度変化のみでなくリハビリテーション医学の発展による出題範囲の増加も関係しているであろう。

これらのことから、少子高齢化は、近年、巷でよく話題にされる「療法士の質の低下」という表現に少なからず影響を及ぼしているものと思われ、その対策として国家試験問題の難易度を変化させることに繋がっていったものと思われる。

では、国家試験が意味するものは何であろうか。私は、「合格者が患者を担当するにあたって、専門家として最低限の知識を身につけたこと」を意味するものだと思っている。つまり、国家試験合格は専門家としての入り口であるということである。これは、どなたもそう思っていることであろう。

では、専門家とはどういう人をいうのか考えてみたい。広辞苑によると、専門家とは「ある学問分野や事柄などを専門に研究・担当し、それに精通している人」とある。ちょっと言い過ぎかも知れないが、「勤勉に学習・研究し続けることで、その分野の知識に詳しくなった人」と言えるだろう。そして、優れた専門家は、この知識に基づいて問題解決の意志決定や判断を行うことができる人と言ってよいだろう。（ただし、優れた専門家による判断の全てが正しいとは、必ずしも言えないであろうことを付け加えておく。）

話がちょっとズレたが、みなさん、特に若手のみなさんには、勤勉に学習・研究をしてきた先輩（他職種含む）方を頼って、症例検討だけではなく勤勉に学習・研究をしていただき、優れた療法士の専門家になっていただきたいと思う。

編集後記

世間は平昌オリンピックで盛り上がり、当院OT室でもフィギュアスケートを鑑賞し、普段静かな患者さんも注目して見ていました。一方リハビリテーション業界としては診療報酬・介護報酬同時改定を控え新しい情報がどんどん入ってきており、十分な理解と対応が求められています。

さて今年も無事に本刊の発行に至りました。査読や編集にご協力頂いた皆様には心より感謝申し上げます。今年度は県学会の日程が変更となり演題数減少も危惧されましたが、多くの演題が集まり安心しました。そのまま論文まで…とはすぐに繋がりにくいですが、来年度から県士会での研究、発表サポート事業を開始する予定です。「発表したいけど指導者がおらず難しい…」「研究を始めたいが手法がわからない…」などの要望に対し、領域別の担当者が応えていくという体制になりますので、各支部等で気軽にご相談ください。

学術部担当理事	麦井 直樹
	河野 光伸
学術誌編集委員長	堀江 翔
編集委員	出雲 健志
	西 悦子
	小林亜里沙
	寺嶋 翔子
	仁木 裕也
	白田 明莉
	岡本 聡美
	越田 雄
	宮腰 真
	大西 知江
	山本 紗季
	米田美登里
	柳内百合香
	杉中 菜子
	菊池 ゆひ
	高間 達也

石川県作業療法学術雑誌（第26巻 1号）（通巻26号）

2018年3月15日発行

編集 公益社団法人 石川県作業療法士会

発行所 公益社団法人 石川県作業療法士会

印刷 ヨシダ印刷株式会社